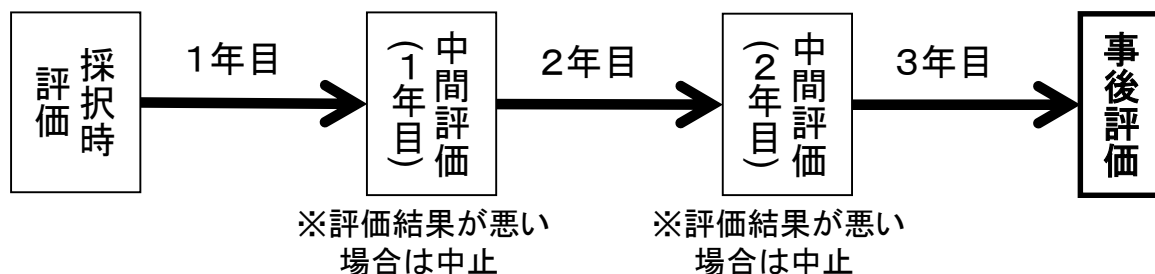


令和4年度終了課題の事後評価の実施方針案について(概要)

1. 位置付け

採択～評価の流れ(研究期間3年の場合)



2. 目的

- ・ 研究課題の目的達成度や研究成果等を適切に把握し、研究成果の道路政策への反映見込み等を評価
- ・ 今後の制度全体の評価や見直し等に活用すること

3. 手順(スケジュール)(案)

① 研究終了報告書の提出 (3月～5月末)

① 書類の事前査読 (~6月末)

- ・ 評価分科会各委員による書類の事前査読。
(委員からの質問・コメントがある場合は、研究代表者へ事前に連絡)

② 研究評価会・研究成果発表会の開催 (7月頃)

- ・ 各分科会ごとに研究評価会を開催。
- ・ 分科会各委員は研究課題ごとの事後評価シートを作成。
- ・ 各委員作成の事後評価シートを基に、研究課題ごとの事後評価(案)作成のための審議。

③ 事後評価(案)の作成 (7月末)

- ・ 研究評価会后、分科会長が事後評価(案)を作成。

④ 事後評価の決定 (8月頃)

- ・ 新道路技術会議において事後評価(案)を審議し、合議により事後評価を決定。

⑤ 事後評価結果の通知及び公表 (8月頃)

- ・ 研究代表者に書面にて事後評価結果を通知
- ・ 道路局HP等において、成果報告レポート及び公表用資料と併せて事後評価結果を公表

4. 評価の視点(案)

研究の 視点	研究目的の達成度	研究目的に照らして、その達成の度合いはどうか。
	研究成果	評価できる研究成果を上げたか。研究成果が当該研究分野等の発展に寄与できたか。
	研究成果の活用・発展性	得られた研究成果の活用や発展性などの今後の展望はどうか。研究成果の積極的な公表・普及に努めているか。
行政の 視点	道路政策の質の向上への反映見込み	研究成果の実務への反映見込み等、道路政策の質の向上に資するものとなっているか。
	研究費規模とその成果	配分された研究費規模に見合う、研究成果及び道路政策の質の向上への寄与となっているか。

5. 評価基準(案)

評点	説明
A	研究目的は達成され、十分な研究成果があった。
B	研究目的は概ね達成され、研究成果があった。
C	研究成果は一部に留まった。
D	研究成果があったとは言い難い。

6. 対象研究テーマ及び担当分科会(ソフト分科会)(案)

分科会	テーマ	タイプ	採択年度・番号	委託研究テーマ	研究代表者	研究概要
ソフト分科会	-	IV	31-4	自動運転とシェアリングが融合した新しいモビリティサービスと社会・都市・生活の未来についての研究開発	熊本学園大学 教授 溝上 章志	「自動運転」と「シェアリング」はSociety5.0を支える主要技術であり、両者が統合した自動運転シェアリング(AVS: Autonomous Vehicle Sharing)は究極のモビリティサービスを提供するであろう。本研究開発では、AVSサービスに対する市民の要望や社会的受容性、既存公共交通事業との関係、駐車場需要や都市構造・社会生活への影響など、AVSサービスが実装された後の総合的モビリティサービスのあり方と社会・都市・生活の変化・変容について、技術的・社会的側面から検討を行う。
	-	IV	2020-1	マルチスケールな拠点空間計画のための新たな行動モデル研究	東京大学 教授 羽藤 英二	自動走行交通ネットワークに対応した交通拠点整備計画において、従前のHWHのような単純な交通行動のパターンを前提にした手法論が、情報化、近居・遠居の浸透、経済の停滞を背景に転換を迫られている。本研究では、長距離バスや自動走行シェアリング技術の進展に伴う、1)交通拠点施設内と接続空間における3次元行動モデル、2)1km四方の交通拠点近傍の人々の行動パターンの解析と予測、3)2次交通を含む都市圏域における人々の行動パターンの解析と高速計算手法の構築、4)日本全体のマルチスケールな交通需要予測の解析方法を開発することを目的に実施する。
	-	IV	2020-2	公共交通ターミナル整備の空間経済分析に関する研究開発	金沢大学 准教授 高山 雄貴	本研究では、公共交通ターミナル整備がもたらす長期的・広域的な効果の空間分布を計量化するための空間経済分析手法を開発する。具体的には、公共交通ターミナル整備が都市内交通・土地利用に与える影響を評価する手法と、高速バス網の拡充による周辺地域への波及効果を評価する手法を開発する。そして、これらの手法により、実都市(札幌、金沢を想定)でのターミナル整備により長期間・広範囲に渡って発現する効果を計測する。
	-	IV	2020-3	バスターミナルを中心としたレジリエントなスマートシティ拠点の機能評価の研究開発	広島大学 教授 藤原 章正	主に呉バスタプロジェクトを対象に、災害に強いレジリエントなスマートシティ拠点機能の計測・評価手法の開発を行う。マクロな視点からみた都市間アクセス機能、メゾな視点からみた都市圏交通マネジメント機能、ミクロな視点から見た拠点内移動機能に分けてフィールド実験を通じて検証する。
	1	I	2020-4	ダブル連結トラックおよび貨物車隊列走行を考慮した道路インフラに関する技術研究開発	東京海洋大学 教授 兵藤 哲朗	車両数の継続的な増加が見込まれている全長23m超のダブル連結トラックや、数年後の商用化が期待される隊列走行について、SA/PAIにおける駐車場確保の問題や、走行区間延伸の課題が懸念されている。さらには、連結・解除を行う拠点の配置や規模、機能についても十分な分析がなされていないとも言えない。本研究では、それらの課題について、先進的な実データも用いた定量的分析を加え、道路インフラが備えるべき将来像を提示することを最終目的とする。

6. 対象研究テーマ及び担当分科会(ハード分科会)(案)

分科会	テーマ	タイプ	採択年度・番号	委託研究テーマ	研究代表者	研究概要
ハード分科会	8	II	2020-8	PC 鋼材、定着具、鉄筋にステンレス鋼を用いた新たな高耐久プレストレストコンクリート構造の開発	長岡技術科学大学 教授 下村 匠	プレストレストコンクリート構造の耐久性の飛躍的向上を目的に、鉄筋、PC 鋼材、定着具のすべての鋼材にステンレス鋼を用いることにより鋼材腐食の危険性を払拭したプレストレストコンクリート構造部材の開発・実用検討を行う。
	8	II	2020-9	中性子によるコンクリート塩分濃度非破壊検査の技術研究開発	理化学研究所 チームリーダー 大竹 淑恵	コンクリート橋等の建造物の主な損傷原因である塩害に対する未然防止、補修費の削減、長寿命化を図るため、コンクリート建造物中の塩分濃度を現場で非破壊にて測定できる中性子ポータブル塩分濃度計の開発を行う。
	8	II	2020-10	マイクロ波レーダとトモグラフィの融合による複素誘電率定量イメージングを用いた空洞・鉄筋腐食識別についての技術研究開発	電気通信大学 大学院 准教授 木寺 正平	本研究では、マイクロ波複素誘電率イメージング法と多偏波データ深層学習を統合することで、革新的なコンクリート内部非破壊空洞・腐食の探知・識別法を確立し、道路・トンネル内部非破壊検査における実用化を目指す。
	-	IV	2021-4	高出力X線および磁気計測によるPC橋梁の腐食状況の検出と構造安全性評価に関する技術開発	金沢工業大学 准教授 田中 泰司	塩害やグラウト充填不足などによってPC鋼材が腐食している橋梁の腐食状況を非破壊で検出できる高出力X線装置および磁気計測装置を開発し、さらにその結果を構造解析に反映して構造安全性を定量的に評価する技術を確立する。
	-	IV	2021-5	レーザー打音検査装置を用いた橋梁・トンネル等の道路建造物のうき・剥離の定量的データ化による診断技術の技術研究開発	名古屋大学 大学院 教授 中村 光	本研究では、トンネル点検で社会実装が進みつつあるレーザー打音検査装置について、音波ではなくコンクリート表面の変位(動き)を遠隔で計測できるレーザー打音検査装置の特徴を活かし、「うき・剥離の状態」を定量的データ化することで、検知・記録から診断する技術へ進化させ、橋梁等の道路建造物にも適用範囲を広げるとともに、従来点検以上の品質と効率性の向上を実現する。